
見つめあったら逃げてね

有里

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

見つめあったら逃げてね

【Nコード】

N3103X

【作者名】

有里

【あらすじ】

サイトより転載。

昼休みの間中、萩宮と2人だけで同じ空間にいたくちやいけないなんて拷問のなにものでもない。息が詰まる。気持ち悪くなりそう。それなら姫ちゃん先輩でも雄二先輩でもいい、寧ろひとりでもいいし。萩宮だけは勘弁。……高校1年生同士、昼の校内放送で一緒の当番になった2人の話。

月曜日

「あ、そうだ佐伯、」

昼の校内放送を終え、流していたCDを元に戻したりと後片付けをしている最中、すっかり忘れていたものを思い出したように2年のケン先輩がこっちを見た。どうせ下らないことだろうと思いながら、草臥れた鞆を肩に掛ける。

「なんすか、」

うちのクラスは、次は選択体育の授業なのだ。いつもはこの放送室にジャージを持って来ているのに、今日に限ってロッカーに忘れてしまったので、早く取りに行って着替えなくちゃならない。

「先輩、明日も今日と同じでいいすよね。…あれ、ボスのCDどこ置いたっけ、…お、あったあった、」

明日流す曲はケン先輩も大好きなBOSSの曲だ。自分で言うのもなんだが、俺も先輩もBOSSの熱狂的なファンで、俺たちが当番の1週間はBOSS強化週間と言ってもいいだろう。曜日ごとに流す曲を決めていて、毎回放送ではそれを流すことにしている。

BOSSは80年代を代表するロックグループの一つで、最も過

激で最もクールなロックグループと謳われていた。俺は母親の影響でBOSにハマって、ホントに小さい頃から聞いていたけれど、同年代には話の合う奴がいなくて、というよりもそもそもがBOSを知らない奴ばかりで悔しい思いをしていた。高校に入ってから、珍しくBOSファンであるケン先輩に会えたわけだけども。汚い色をした放送室の壁に掛かる時計を見れば、ちょうど1時だった。あと10分か。あとは放送室の鍵を閉めるだけだし、これなら余裕で間に合うなんてぼんやり思っていたら、ケン先輩はけろっとした顔でとんでもないことを言った。

「明日から俺、しばらく学校休まなくちゃなんねえから、当番1年の萩宮に代わってもらったから。」

「……………は？」

そこんところロシク、なんて言いながらひらひら手を振って出て行こうとしたケン先輩の腕を慌てて掴む。

「ちよ、どういことつすか！ 休むって…俺聞いてないっすよ！ つーかそれよりも萩宮って……………なんでよりもよってアイツなんすか?!」

最悪だ。最悪だ最悪だ。

「え、だって姫にも雄二にも断られちゃったし、1年同士の方がお前も氣イ遣わなくていいだろ。」

無理。昼休みの間中、萩宮と2人だけで同じ空間にいたくちやいないなんて拷問のなにものでもない。息が詰まる。気持ち悪くなりそう。それなら姫ちゃん先輩でも雄二先輩でもいい、寧ろひとりでいいし。萩宮だけは勘弁。俺の凄絶な顔を見て、ケン先輩はきよんとんとして、あれお前萩宮のこと嫌いなのか？なんて聞いてくる。嫌いなにも…。

「無理っすよあんな根暗。喋り方もボソボソ小さい声でなに言ってるか分かんないし。いつも人の顔色見てもじもじして怯えてるしキモイし。」

顔半分隠れるくらい前髪が長くて、いつも下向いてボソボソ言ってる感じで。なんであんな奴が放送委員会なんかなかったんだってくらいだ。俺の言い草と顰め面に、先輩はあははとおかしく笑って、だけどにこやかにしながら、そっかあ、と頷いただけだった。なんだその適当な反応。

「でももう萩宮に頼んじやったもんね。…なあ、佐伯。食べず嫌いと同じで、話してみればいい奴かもしれないぜ。仲良くしろよ。」

そういえば委員会の集まりとか話し合いの時に、ケン先輩は萩宮の隣で何か話し掛けてたっけ。ケン先輩だけが何かと、大人しくひ

とりで座ってる萩宮を気にして声を掛けてる。それでも、…。

「というか、実際の奴だし萩宮は。」

「俺、絶対嫌っすから。」

つん、と顔を背ければ、先輩は相変わらずにこここ笑いながら、そっかあ、と言っただけだった。…ったく、最悪の気分だ。もう3分前だし、今から走っていても着替えなくちゃなんないしめんどくさい。

先輩は広げっ放しだった弁当をちゃっちゃと片付けて、先に部屋を出た。

「じゃ、頼むよん。」

……聞かなかったことにしよう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3103x/>

見つめあったら逃げてね

2011年12月5日12時51分発行